

# SSKW

# 海から海へ

No.27 2011.5.4

【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ  
〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5  
マートルコート調布407  
Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878  
<http://umi.or.jp> [office@umi.or.jp](mailto:office@umi.or.jp)



「カラーのささやき」制作中 2009 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

## 「海から海へ」について

「海から海へ」という名前は何を表しますか?とよく聞かれます。とても良い名前ですね、とおっしゃる人もいます。いろんな意味が考えられます。年度の初めにあたり、あらためてその意味を考え、今後の活動の指針としたいと思います。

「海」は広くて大きく、深い。いのちの源、底知れない深みには何があるのか分かりません。自分のこともそうです。人は自分のことはよく分かりません。無意識の深みに何があるのか。いのちのこともほんとうはよく分からない。ですけれども、これだけはまちがいないと思うことがあります。それは、人は一人では生きられないということです。

誰かがそばにいて、その人と目を合わせたり、その人の声を聞いたり、その人と眠る。そういった日々はすばらしいです。そう確信する自分がいます。眠りにつく前に、今日の出来事を振り返ります。そのことを話す相手がいることはすばらしいことです。

人は無意識の深みにあるものに支えられていると思いますが、そのことを実感するには、相手が必要だと思います。なぜなら、無意識というのは普遍的で、誰もが無意識に支えられているからです。無意識を通して人は人とつながることができると思います。

さて、ほんとうに大事なものは何だろうかと考えます。大事なものであれば、それは普遍的だろうと思います。特殊なものではないはず。誰もが大事に思うものは何でしょう。頭で考えることは、皆違います。頭で考えることは、違って面白いです。ほんとうに大事なものは言えません。大事なものは、普遍的なもの、それは、無意識の深みにあるものと言えるのではないのでしょうか。私は、いのちを支えているこの普遍的なものを「海」と呼びたいと思います。

「海から海へ」の定款では、「障がいをもつ人から渡される豊富なもの」と書かれています。障がいがあってもなくてもいのちある存在であれば誰でも「豊富なもの」をもっています。しかし、多くの場合、人は人に多くを渡さず、渡されないように思います。そのことを望んでいながら、果たせず、嘆いています。障がいのある人は、誰もがもっている豊富なものの存在に気づかせ、それをどう受け取ったらよいか、どう渡したらよいかを教えるトレーナーとしたいへん有能です。

たとえば、娘は障がいを持ちます。彼女は人にたくさんものを渡していると思います。しかし、多くの場合、相

手は、はじめは、渡されているとは思いません。渡され受け取るには、何かが必要です。それは、その人が何を喜びとしているのか、何をしたいと思っているのか、何に痛みを感じるのか、何を考えているのか、何をしようとしているのか、を掴みたいと思う気持ちです。この気持ちをもつにはトレーニングが必要です。彼女と接していると、このことがだんだん分かってきます。娘はたいへん有能なトレーナーと思います。

芸術(アート)について考えます。アートは人の無意識の表れだと思います。普遍的なものの直接の表れといえます。自然界は普遍的なものに満ちています。花は美しく、空の星、優しい海の表情、険しい山、皆そうです。人という生き物も、そういう普遍的な美しいものを持っています。しかし、人は、動物や植物など他の命あるものと異なり、存在自体が美しいといえません。人は自然と切り離され、自分の都合で自然とつながっているからだと思います。したがって、人は、ただそこにいるだけで美しい動物や植物と異なり、表現という作業が必要になります。その表現形態がアートといえます。

一方、社会というものは意識の塊ですので、無意識の存在を疎ましく思います。邪魔に思います。排除しようとする力さえ働きます。その結果、自分の存在を支える普遍的なものを遠ざけてしまいます。高齢者や子ども、生産に寄与しない人々を、価値のない存在としてしまいます。彼らこそ、無意識に近いと言えるのに、です。この傾向は、自然法則のように思えるほど、強固なものです。人の社会はそのような法則にしたがって、どんどん非人間的な方向に進んで行っていると思います。

私たちのアプローチは「障がい」と「アート」です。障がいを通して人間の社会の問題点が明らかになってきます。この社会は「障がい」は価値がないとみなします。しかし、障がいをもつ人は、ほんとうに大事なものを気づかせる有能なトレーナーです。このような価値観の転換を社会に促したいと思います。これは、社会のさまざまな深刻な問題を解決する一つの道筋になると思います。

またアートを通して、大事なものが目の前に指し示されます。アートを通して人は無意識の海でつながることができます。喜びをともに共有できます。

多くの人がこのことに気づき、ことばを発し、行動してきました。私達もその一員になりたいと思います。

「海から海へ」は、このような考えのもとに今後も活動していきたいと思っています。今年度もどうぞよろしくお願い申し上げます。

阿部公輝

## 映画『わたしを離さないで Never let me go』 から思うこと

4月に映画を観た。以前、カウンセラーとして勤務していた中学校の図書室で見つけた本『わたしを離さないで』が映画化されたので、上映館が一番近い立川まで家族3人で出かけた。時折小雨が降るものの、鉛色の空の隙間から春風が手に届くような日曜の午後だった。

娘は映画を観るといふより外出が好きなので、字幕が理解できなくてもほとんど一緒に出かける。瞬きをしないでジーンと映像を見続けている「眼の人」だ。彼女は吉永小百合さんが主演し、落語家鶴瓶さんが弟役を演じた『おとうと』のような邦画のほうが好き。特にだめな人が出てくるとしっかりしなさいと思うらしく、見終わったあとも、何度も「だめね」と相槌を求めてくる。私たちが「そうね」とそのたびに応えるが、そんなに言わなくてもいいじゃないのと、思うときもあって、つらい。一途に生きる娘の一面が現れているときだ。

さて、2年前。本を手にしたときの理由は何だったのか。おそらくタイトルに引かれたのだろうと思うが、確かではない。動機は不純めいているが、読み進むと、今までに出会ったことがない世界に自分が置かれ、幾ばくかの不安状態が生まれた。しかし、その本は、不安を拒否するどころか、ぐいぐいとある異質の領域へ招く。最後に到達したときの、何かにすがりつきたい思い。空虚感、茫漠感、無力感に打ちのめされた自分。それが、読書を終えた私の姿であった。

映画はそれをさらに深くする。役者が良かった。イギリスの風景が良かった。本とはまたちょっと違う作家カズオ・イシグロが創りあげる世界は観る人を川に浮かぶ木の葉のように翻弄する。それは良い意味でのこと。過去にまったく目の当たりにすることがない根源的なものを創りあげ、提示するのが芸術家の使命とするなら、カズオ・イシグロは、本でも映画でも、体験したことのないすさまじい衝撃を私の体の中へ突き抜けさせた。

『わたしを離さないで』では、〈提供〉という言葉が、特別な意味を持つ。〈提供〉とは、病にある人間に臓器を提供するために、クローン人間として生を受けた彼らの使命を表す。映画は彼らのエピソードを盛り込みながら、生育歴を映し出し、大人になったキャシー、トミーとルースの3人が再会する場面へと進む。過去に思いを成就できなかったキャシーとトミーの2人に対し、死を前にしたルースが許しを請う。死を前にしたとき、誰もが自分の過失に対して謝罪できるならば許しを乞いたいと思う、人としての良心なのか。ルースは許されたのだろうか、救われたの

だろうか、何度目かの臓器提供の手術を終え、死を迎える。

残された2人は、思春期から数えればとても長い時間を経た今、やっと愛を得る。しかしトミーの命もこのままではあとわずか。手術により臓器が提供され続けられれば、命は終わる。

愛を永遠にと願うトミーとキャシー。彼らは愛するもの同士は特別の計らいで永らえることができるといううわさを元にそれを得るため、かつての学校の保護者と呼ばれるマダムを訪ねる旅に出る。トミーはその判断の基準は二人が本物かどうかを見分ける作品を通してだと考えて絵を描き溜める。

「作品は作者がどんな人間かを物語るからです」

「つまり、作品は作者の内部をさらけ出す」

「作者の魂を見せる」

という会話の後に、スケッチブックを見せたトミーとキャシーに返ってきたのは「あなた方にも魂が——心が——あることが、そこに見えるところからです」と言うことば。マダムが言う「かわいそうな子たち」に絵が描けるかどうかを試されていたという事実。映画を観ている人にはわかったはずだ。魂というものは、人間にしかないものではないことを。コピーされた人間であっても、生ける者はすべて魂を持っていることを。SF映画ではない。今を生きる私たちのテーマで謎ではないことを。

私はあのシーンを忘れない。絶望するトミーの姿。恋人同士が数年間、〈提供〉を猶予されるということはないと知らされたトミーとキャシー。

絶望したことがあるのかどうか、本人以外は知らないだろうと思う。絶望は自らの行為や思考の果てに行き着くものと他者によりもたらされる場合があると思う。前者の場合は自分を責めるだろうが、自分と折り合いが付けば、生きる希望を見出すことも可能になってくるのではないかと。後者の場合は、他者を責めても解決できないとき、本当に希望を失い、絶望は絶望のままとなるのではないかと。

暗黒の世界。トミーが咆哮し、絶望に挑み、絶望を踏みつけようとするとき、キャシーがトミーの体にしがみつき、トミーと心身ともに一体になろうとしているように見えた。絶望をわが身に携えて、生きることはできるのだろうか。もしかしたら、絶望を誰かがわかろうと受け止めてくれたなら、人間は生きられるのかもしれない。そう思わずにいられない、壮絶な場面だった。私の目から涙がとめどなく落ちた。

連休のある日、安曇野にある礫山美術館を訪ねた。30歳で急逝した荻原守衛の作品が展示されている。礫山が吐血する少し前に粘土で原型を完成させたという「女」の像、鑄造されたブロンズと粘土の両方を観た。モデルは新宿中村屋創業者の女主人相馬黒光といわれている。女性が嘆き苦しむ様を見てとった先に、天を仰ぐポーズには希望がか

すかに表わされていると、学芸員の説明を聞いた。碌山は黒光の夫愛蔵に他の女性の存在を知る。そのことを知り苦しむ黒光。その黒光に思慕を寄せる碌山。人間の底知れぬ愛憎も謎深く、作品を創造する力となる。

「しょうがい児を生みたかった」と言う人に一人だけお目にかかったことがある。が、そういう人はめったにいないのが私の今までの印象だ。私が「しょうがいの子どもがいます」と言うとき、相手の方の気遣いが重く感じられてしまうときがある。こちらとしては話す方が気持ちを開けるようで楽になるからだが、受け止める方とのやり取りを想像すると難しいなと実感することもある。

10年ほど前、アメリカの学会へ行った帰り、シラキューズという町で、しょうがいを持つ子どものお母さん何人かにインタビューをするために会った。彼らの一人はその子をギフトと思っていると話された。私も今ではそう思う毎日だ。

しかし、私の場合、娘がしょうがいを持っているとわかったときは違っていた。診断された後、駆り立てられるような焦燥感に襲われた記憶がある。ドクターショッピングという医者通いを繰り返し、さまざまな試みにエネルギーを注ぎ、一息ついたときに、ようやく現実を受け入れたと思う。しかし、心身の不調に見舞われた。

その主因はしょうがいを持つ娘とともに生きる私を理解してくれる人が近くにいなかったからだとはっきり言える。他者に期待しても叶わない現実に奈落の底に落とされたと感じたのだらうと思う。それに加え、生きる目的を失っていた。生きることが楽しくなかった。そういう楽しみを自分が見つけられなかったということかもしれない。自分のこれからは楽しくないかもしれないという予測を漠然とした不安を感じながら持っていたのかもしれない。それらを絶望という言葉にするのは少しためられるが、そのころ私は生きるのがつらくなっていた。

そのようなある日のこと、息子を見たとき、この子は楽しそうだなと思った。私がいなければ、子どもたちはどうなるのだらうと思った。それから、子どもという時間が私の生きる目的のひとつになった。少しずつ私は回復して行った。完全回復は突然やってきた。最後は自分の強い思いが生まれ出て、私は再び、生きることに執着し、今に至っている。その彼から、昨日カーネーションの鉢が届いた。

自分の生を自分をさておいたまま、力づくで操作されることや決定されることは、あってよいはずがないと人々は知っているにもかかわらず、私たちの世界では行われている。他者から運命を変えられてしまう「人」に想いを重ね、新たに娘の絵画に魂を見る。傍に受け止めてくれる人のいる気配を感じながら…。

阿部愛子

引用：カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』

土屋政雄訳 早川書房 2008

**田中瑞木美術館は5月22日(日)より  
毎日曜日午後1時から5時、開館いたします。**

## 平成23年度通常総会開催のお知らせ

日時 2011年5月22日(日) 午前11時～12時  
場所 調布市布田1-32-5 マートルコート調布407

## 平成23年度会費納入のお願い

新年度になりました。平成23年度会費・寄付金の納入をお願い申し上げます。美術館の活動をはじめ本法人の事業に生かしてまいります。

昨年度は、多くの方々からたくさんのご入金をいただきました。ありがとうございました。次号にて平成22年度の事業および会計のご報告をいたします。

### 年会費

正会員 3,000円以上 (活動にご参加いただけます)

協力会員 1,000円以上 (会報をご購読いただけます)

賛助会 30,000円以上 (法人様を対象としております)

寄付金 (随時お受けしております)

振込口座

①ゆうちょ振替：00110-0-684539

②銀行振込：みずほ銀行 調布支店

普通預金 8082621

口座名称 (①②とも)

特定非営利活動法人 海から海へ

### 編集後記

甲州街道の櫓の並木は明るい緑のトンネルです。初夏の美しい季節ですが、社会福祉士として、味の素スタジアムに避難してきている福島の方々の相談で相対していると、何代も綿々と続いてきた豊かな土地や海での暮らしから突如切り離され、この都会の競技場の体育館内の、仕切られた区画に置かれ、不安にさえ慣らされようとしている不条理に、私達はいったい何をしてきたのかという思いでいっぱいになります。日常の背後にいつも非日常を感じるこの頃です。(輝)

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

2011年5月4日 海から海へ No.27

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5

マートルコート調布407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価200円

無断転載禁止

